

RAVUS

Creator

澤田翔平 Shohei Sawada

アートディレクター／凸版印刷株式会社

1985年生まれ。武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒業後、トッパンアイデアセンタークリエイティブ本部在籍。入社以来、主に企業の販売促進ツール、ブランド・アイデンティティなどのアートディレクション、デザインを手がける。TOKYO GRAPHIC PASSPORT at Centre Pompidouにおける展示、CANNES LIONS LIONS Health PHARMA 銅賞、CLIO Award CLIO Healthcare Design 銅賞、SPIKES ASIA DESIGN 銀賞、THE ONE SHOW Design Merit 賞、全国カタログ・ポスター展 経済産業大臣賞、Tokyo Midtown Award 審査員特別賞などを受賞。

Printing Director

尾河由樹 Yuki Ogawa

Photographer

中津祐一 Yuichi Nakatsu

多様なイメージを内包するグレーの世界の拡張に挑む。
灰色はラテン語で“RAVUS”という言葉になる。
白と黒、光と闇、影と陰の合間にある曖昧な領域、

グレイッシュな世界を突き詰める

グレーをテーマにしようと決めたのは、“Fusion(融合)”から「混ざり合う経過」というイメージが浮かんできたからです。グレーは黒と白の合間にある色です。とても曖昧な世界ですし、なかなか定義も難しく、ものすごく奥が深い。この機会にグレーが内在する表現の幅をどこまで広げていけるかチャレンジすることにしました。

グレーの世界の面白さは?

もともとモノクロやグレイッシュな世界は純粹に好きな色でした。グレーには他の色にはない豊かな表現域があるように感じます。決して目立つ色ではないし、誰もがきれいだと思ってくれる色というわけでもありません。それでもグレーに奥深い美しさがあるように感じるのは、おそらく私が日本で生まれ、霧や霏のかかる風景を美しいと思って育ってきたからなのかもしれません。

「RAVUS」というタイトルの意味は?

ラテン語で灰色を意味する言葉です。耳慣れない言葉を使うことにしたのは、固定観念を持たずに作品を見てほしかったからです。なぜならグレーという言葉には様々な意味が内包されていて、人は皆、自分なりのイメージを持っているように思ったからです。影や雲を想像する人もいれば、心理的な情景を思い浮かべる人もいる、そんな曖昧

な含みを持った色だからこそ、タイトルに縛られることなく見つめてほしいと思いました。

対話と協同からグレーの世界を

グラフィックトライアルはPDと一緒に、徹底的に対話しながら作品をつくっていきます。素材づくりでも徹底的に表現世界を追及することができます。通常の仕事では滅多にないこのチャンスを生かし、制作プロセスを大切にしながら印刷の面白さを引き出していくことを目標に取り組みました。

まずは構想ですね。

当初から5枚をそれぞれ別の手法でグレーを表現しようと考えていました。そこでPDの尾河さんにもどんな方法が考えられるか提案してほしいとお願いしました。すると、5版も版を重ねて階調を繊細に表現する設計や、グレーの紙をハーフトーンに設定してそこから明暗をつくりだしていく設計など、驚くようなアイデアが飛び出しました。尾河さん曰く、PDの「閃きと経験」なのだそうですが、おかげで想像を超えたグレーの可能性を見出すことができました。

具体的にはどんなことが?

いちばん新鮮だったのは、分版を確認できたことです。普段の仕事では製版の構造はブラックボックスのようなもので、分版を見る機会はほとんどありません。

ところがトライアルでは分版と仕上がりを見比べながら検証できました。分版を見ればPDがどう考えて版を設計したかわかるし、それをデザインにまで反映しながら詰めることもできます。そうして絞り込んだ印刷設計をベースに、次の段階として、その手法を生かせるグラフィックや素材を考えていきました。

素材は写真でしたね。

最初から写真を素材にしようと決めていました。写真はグレイッシュな中にもトーンや質感など様々な幅が出せるからです。モチーフを自然物にしたのは、自然の造形のもつ美しさを表現したかったからです。5つの素材は、圧倒的なスケール感のある風景から、手の中に納まるような小さな静物まで、マクロとミクロを取り混ぜながら、さまざまな質感を取り込むことにしました。多様な素材を自分の解釈でどんなグレーの世界に展開できるかを挑戦するためでした。

撮影はかなり大変だったとか。

スタジオもあればロケもあり、ロケハンまで含めるとかなり長期間にわたる撮影になりました。でも、始めから撮影で



澤田翔平 Shohei Sawada

も思いきりトライアルしたいと思っていたし、今回はフォトディレクションから徹底的にやろうと決めていました。イメージをカメラマンと共有して、一緒に時間をかけて作り込んで、ボツも含めると相当な量を撮影し、雪山での過酷なロケもしました。苦労したぶん満足する良い絵が撮れて報われました。

撮影は中津祐一さんですね？

そうです。写真と絵画の中間のような表現で絵作りができるだけでなく、すごくグレイッシュな世界観を持っているんです。彼のセンスと私のやりたい表現を掛け合わせれば、思い描くようなグレーの世界が実現できる、そう確信してお願いしました。まず5枚のイメージを私が制作し、それをベースに中津さんと共にロケハン、撮影を繰り返し、納得するイメージを作りあげました。彼と作り込んだ素材をデザインに落とし込み、PDの力を借りながら印刷物に仕立てたことで、想像以上の面白さを見出すことができたのだと思っています。

様々なグレーの世界を

作品は1枚ずつ異なるグレーの世界を異なる手法で表現しました。スケールも質感も全て異なる自然物をモチーフに、グレーの世界の拡張に挑みました。

「さらびやかなグレー」
光の角度によってきらめく紙の特性

に着目して、雪山の白くキラキラと光る世界を表現しました。「シメ版」と呼ばれる堅い版をメインの調子にしているため、紙地が残って、金色の輝きが不思議なトーンを醸し出しています。グラフィックと版の設計が絶妙に絡み合った一枚です。

「絵画的なグレー」
木炭デッサンを思わせる不思議な質感と世界観を生かしたくて、黄金比を内包するオウムガイでちょっと哲学的な味わいを狙いました。艶やかな質感を生かしつつ、立体感を感じさせない絵画的なグレーの世界が実現できたとします。

「鎮かなグレー」
高細線で微妙なグレートーンを重ねる手法が、スローシャッターの作り出した緩やかな海と相まって、繊細なグラデーションを生みました。岩場や水の鏡面など、意外と多くの質感を含みながらも、ひたすら静かな世界になりました。

「たなびくグレー」
不透明な白インキを混ぜたグレーで刷ったら、油彩画のような厚味のある不思議なグレートーンが生まれました。厚く重みのある雲の中に浮遊する繊細な羽根のコントラストにも、グレーの生み出す質感の豊かさが潜んでいます。

「屹立するグレー」
素材は、現象の技を駆使して遠景の写

真をグラフィカルに仕立てました。グレーの紙地を中間色に見立て、ライト部はネガ版で、シャドウ部はポジ版で作成し、ホホワイト、シルバー、スミのインキも使い分けるといった複雑な版設計になっています。さらに、インクジェットで白でハイライトを効かせることで、調子の幅が広がり、プラチナプリントの粒子感も含め、グレーの可能性が広がられたと思います。

印刷の面白さを

今回、トライアルを通して印刷の面白さを改めて確認することができました。カメラマンやPDと対話しながらの作業は、印刷が人の知恵と技の結晶だということを改めて教えてくれました。同時に、ひとつひとつの局面で問われる取捨選択の厳しさや、決断することの難しさを痛感しました。グレーという非常にレンジが限られたテーマを選んだことで、印刷設計でどれだけ表現の幅を拡張できるのかを伝えられたと思っています。

最後に、来場者に一言お願いします。

この作品を通して、普段目にしていないモノトーンとは違うグレーの世界の広がりを感じてもらえたらと思います。その面白さ、美しさを感じていただくとともに、それを実現した印刷の奥深さにも興味を持ってもらえたら嬉しいです。



Point of Trial

トライアルのポイント

モノトーン表現を5つの異なる印刷設計で多様な質感と世界観を目指した

インキの性質を変える

不透明インキで厚みを創出する

インキを不透明化して、絵の具を塗り重ねたような効果を出させた。通常、グレーなどの薄い色はスミを透明メジウムで薄めて作るが、今回は不透明インキのオペークホワイトを用いてインキを作成し、厚みのある刷面を実現した。



(左)メジウムで薄めたもの
(右)オペークホワイトで薄めたもの

版構成を活用する

繊細な版でディテールを刷り重ねる

細かな粒子状の網点を持つフェアドット製版で繊細なグラデーションを設計した。敢えてインキを薄盛りにして、中間からシャドウトーンに存在する微妙な階調を表出させた。そのぶん弱まった調子を補完するために、調子版を2版追加した5版構成にし、階調の幅とビジュアルの強さを両立させた。



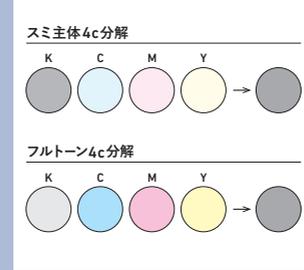
通常の濃度で刷ったもの



薄盛りで刷ったもの

異なる分解設定の版を組み合わせる

蛍光や銀インキを混ぜた不透明なCMYインキをフルトーンの色分解によるCMY版で刷り、絵画的なグレーの調子再現を目指した。また、スミ主体の色分解によるK版を後から刷ることで、グレーバランスを整え、色のバラツキを抑えた。



用紙の個性を生かす

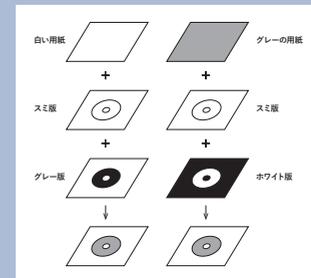
紙の光沢をハイライトの個性にするさらびき系の用紙の光沢を生かした設計。中間トーンのグレーと、2種のシメ版でコントラストを強め、用紙色に合わせたパールインキをスクリーン印刷でライト部の際に刷り紙のきらめきを補填した。



コンクラー・R ゴールドダスト

グレーの紙を中間色に見立てる

紙地を中間のグレートーンに設定し、ライトの階調はネガ版のオペークホワイトで、シャドウの階調はポジ版の特色グレーで刷り重ねた。白さを強調したいハイライト部分には、オフセット印刷よりインキの厚みを出せるインクジェット印刷を使用した。





1

1 印刷方式[色数]—H-UVオフセット印刷[3]+
シルクスクリーン印刷[3]
スクリーン—AM280線、200メッシュ(100線)、300メッシュ
用紙—コンケラー・IR ゴールドダスト 103.2kg

2 印刷方式[色数]—H-UVオフセット印刷[4]+
シルクスクリーン印刷[2]
スクリーン—AM280線、300メッシュ
用紙—ヴァンヌーボスマース-FS スノーホワイト 110kg



2



4

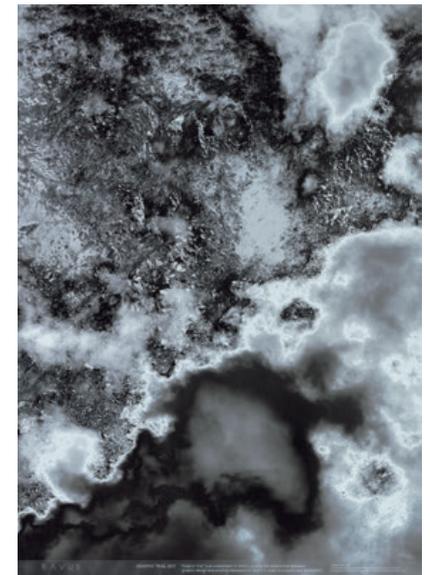
3 印刷方式[色数]—H-UVオフセット印刷[5]+
シルクスクリーン印刷[2]
スクリーン—フェアドット、300メッシュ
用紙—ヴァンヌーボスマース-FS スノーホワイト 110kg

4 印刷方式[色数]—H-UVオフセット印刷[5]+
シルクスクリーン印刷[2]
スクリーン—AM280線、300メッシュ
用紙—ヴァンヌーボスマース-FS スノーホワイト 110kg

5 印刷方式[色数]—H-UVオフセット印刷[4]+
インクジェット[1]+シルクスクリーン印刷[2]
スクリーン—AM280線、300メッシュ
用紙—彩美カード グレー 175kg



3



5